
変わりなき世界の中で

サイレン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変わりなき世界の中で

【Nコード】

N2018Z

【作者名】

サイレン

【あらすじ】

小さな頃俺は真っ暗の世界にいた、何もかもがわからず、生きていくことすら億劫な人生だったが、そんな真っ暗の世界の中で一人の女の子に救われた。

毎週日曜日更新予定

プロローグ

俺の幼い頃の世界は真っ暗だった。

暗い暗い押し入れの中では何一つ見えず、何一つ聞こえず、毎日のように暴力を振るわれ、時々親の気紛れで食べ物やちよつとした物を貰う、そんな与えられた物だけの世界だったが、物を貰えるということに喜びを覚えた。

父と母は仲が悪かった、いや昔は良かったらしいのだが、俺が産まれてから何年かしてから子疲れしてしまつた父は仕事をクビになり毎日、毎日酒やギャンブルに身を染めていた。

母はそんな父を見てわけのわからないことを叫び出したりしておかしくなつたらしい。

俺は物心着いた時から俺は押し入れの中に閉じ込められていて、出ることを許されなかつた、そして毎晩、毎晩狂つてしまつた母に殴られる、俺が泣こうが逃げようとしようがお構い無く殴り続ける。『どうしてアンタなんて産まれて来たの!?』そう呪うように叫びながら…。

暴力は父も振るつてきた、しかし母とは幾つも違つところがある、それはあの呪いの言葉を言わない事や、暴力が終わつて酔いが醒めた後に必ず謝つてきたことだ。

『ごめんよ、俺が、俺がもつと強い心を持つてしつかりしていれば』と父は涙を流しながら俺を抱き締めるが、母の暴力にはまるつきり見て見ぬふりをする。

俺はそんな日々を五歳になるまで過ごし続けていた
人生の転機となつたのは忘れもしないあの例年より暑い夏のある日
だった。

その日は偶々、母の妹が小さな女の子を連れて遊びに来ていた。

俺は誰かが来た時は押し入れで声を出す処か、音が出る行為を禁じられていたから、押し入れから聞き耳をたてて母や叔母がどんなこ

とを話しているかを聞く。

俺の両親以外は俺が押し入れに閉じ込められて虐待されていると言う事実を知らなかった。

母は他人が家に来るとやけに落ち着き、いつものように狂ったような呪詛を言ったりせずに平常心を保っている。

そんなときだった

叔母が連れてきた女の子はいきなり俺が入っている押し入れを開けた。

俺は聞き耳をたてる為に襖に張り付くようにしていたのでいきなり襖が開いたと同時に開けた彼女の直ぐ横に倒れ込んだ。

『きゃああああー』それと同時に叔母の叫び声と母の叫び声が響き渡る。

叔母は俺が今父と遊んでもらってるから居ないと聞いていたのにいきなり俺が出てきた事に驚き、母は今まで隠してきたことの発覚に恐怖し驚いた。

母はその後呆然として叔母が救急車と警察を呼んで連行される時に『私は悪くない、悪いのはあの子よ、そうよあの子が死ねば良いんだった』ぶつぶつ呟きながら俺の目の前から消えていった。

その数時間後に首を吊って自殺をした父が見つかり、その報告を受けた母はパトカーから飛び出し反対車線から来た車に轢かれて死んだらしい。

俺はたった1日で両親を無くしてしまった。

一方俺は栄養失調で倒れて病院に運ばれた。

医師や叔母が言うにはとても安心しきった顔でこのまま眼を覚まさないと思う程に寝ていたらしい。

その日から俺の日常が変わった、眼を覚ましてからまず見たのは、美味しそうな料理だった、見たことも聞いたこともない食べ物がある

を取り囲んでいた。
そして何より世界全体が明るかった。

数ヶ月して元気になった俺は退院を許された、しかし俺が帰る場所
は無く、事件の時側に居てくれた叔母が俺を引き取ってくれた。

初めの方は誰一人信じられず、押し入れの中でうずくまっていた、
そんな俺を変えてくれたのが俺を押し入れから見つけてくれた女の
子だった。

彼女の名前は柴川彩^{さいかわあや}、彼女は俺より一つ下なのに幼稚園が終わると
毎日、毎日心配して押し入れまで来てくれた。

『ねえ、君の名前を教えてよ、それから一緒に遊ぼうよきつと楽
しいよ?』

あまりにもしつこく押し入れを開けて問いかけてくるから、俺は前
から気になっていたことを聞いてみた。

『どうして僕が押し入れの中に居るって分かったの?』

と聞いたら簡単そうに笑顔で答えた。

『当たり前だよ、だって君の助けでって聞こえたんだもん』

俺は今まで自分の生き方を不自由とは思ったが、辛いと思ったこと
は無かった筈だ、それなのに彼女は俺からのSOS信号を受け取っ
たと言っ。

俺はその時理解した、俺は本当に苦しかった事を苦しいと言わなか
ったから知らず知らずの内に知らない誰かにSOSを出していたの

かもしれないと。

俺はその時彼女に賭けてみたいと思った、自分の何かを認めてくれ
そうだからだ。

だから俺は信じてみた、神なんていない、誰もが敵だと思っていた
のに。

『僕は、あいはらゆうすけ相原祐介』

その時彼女は本当に嬉しそうに笑顔で俺に『よろしくね』、そう言
ってくれた

その日から徐々に周囲の人とコミュニケーションを取るようになって
た。

もし、あの日、あの時彼女が俺に気づかずいたら今の世界はあり
得なかったのだろう、闇の中から俺を引きずり出してくれた彼女に
今でも感謝している。

そして俺も彼女を守り、彼女のように人を助けられるようになりた
い、そう願っている。

第一話（前書き）

ひとまず一話だけ投稿します。

第一話

「どうして俺には彼女が一人も出来ないんだああー!!!」

それは突然の出来事だった。

その日の授業もほとんど終わってこの一時間が終われば家や寮に帰れる、誰もがそう思っている矢先の出来事だった。

突然俺の一つ後ろの席の篠しのやだいすけ家大輔が騒ぎ始めた。

俺とこいつは中学の時から腐れ縁というやつで、いつも馬鹿をやつてる相手だった。

「座らんか馬鹿もんがあああー!!!」

担任の明智あけちゆづし総子が即座に怒声を浴びせると同時に手に持っていたチヨークを投げつけた

いつもながら見事な技だと感心していたのもつかの間で、首もとに光に当たって反射するナイフの様な物を向けられていた。

「うおっ!?!」

(この学校でこんなことをする人は数人ぐらいだが、その中でもナイフを使うのはあの人だけだ!)

座っていた椅子を即座に蹴り、そのナイフの様な物を向けた張本人に直撃を狙い、距離をとる。

「……………」

襲撃者は何一つ語らず、ナイフを一閃させるだけで椅子を吹き飛ばした。

クラス内からは彼女の登場に口笛を吹き、歓喜を上げていた。

（お前らは一体どっちの味方だ、少しはクラスメイトを助けようとは思わないのか!？）

そうは思ったが、無駄だと割りきりしつかりと襲撃者を見据える。

「……………」

予想は出来ていたが、いざ対面すると恐怖が湧いてくる、何せ相手は隣のクラスの2年4組『佐上遊』（さがみゆう）、名前とは裏腹にふざけた事が大っ嫌いで風紀委員に勤めている校内では『沈黙の暗殺者』（サイレントアサシン）と呼ばれるほどの手練れなのだ。入学当初から彼女の勘違いで襲われ、あの殺傷能力ないが、触れれば痺れるナイフ『クロジア』を一度回避した後二度目の一振りで痺れさせられたのをよく覚えていて、その時から俺は多少は出来る危険人物として目を付けられていたので、俺が馬鹿をやる度に自然と俺の前に立ち塞がる事が多くなった。

見た目こそは小柄で黒のポニーテールで可愛らしいのだが、校内の風紀を乱そうとした者には容赦がなく、『クロジア』を使い、相手に姿を見られる前に接近し、クロジアの力で痺れさせて事件を解決する、沈黙の暗殺者の由来もここから来ている。

因みに俺と今までの戦績は22戦17勝5敗となっている、そんな俺だが実力は低く雑魚敵もいいところ、簡単に説明すればマオに出てくるノココと同じぐらいの非力さだ、では何故俺がこんなにも勝ち越しているかと言うとちゃんとした理由があるが、今はとりあえず授業中+無罪なので説得してみる。

「ちょっと待ってくれ、俺は授業妨害なんてしてないぞ、大輔が勝手に叫び始めただけだ、なあ皆」

そう言っただけで皆を見渡してみようが、張本人の大輔はチョークによって撃ち抜かれ、臨終、他の皆は我関せずと言わんばかりに黒板に書いてあることをノートに書き込んでいる。

「……………」

(不味い、彼女から負のオーラが出ている、これでは俺の命が！)

選択肢

1 逃げる

2 戦う

3 教師に助けを求める

まあ、選ぶとすれば無難な3と言いたいところだが、俺には分かる、明智先生は間違いなくキレてる、見るあの手をプルプルと震わせ、チョークと言つ名の弾丸をリロードしまくってるじゃないか、今にも発射しそう　っ!？

「うおおおおっ!」

指から弾く様に発射されたチョークは佐上の頭を貫き、本日二人目の犠牲者となった、一方俺はと言うと、発射される瞬間に転がりながら椅子まで直行して、席に戻して座った。

「ふう、では授業に戻るぞ教科書のP15を竹下、お前が読め」

「うっす、えーと日本の経済は」

その後も授業は淡々と続いていた、俺の両サイドに額から煙を上げる二人を残したまま。

第一話（後書き）

続きは二日後ぐらいに投稿します。

第二話（前書き）

なんとか二日で書き終わりました。

第二話

キンコンカーンコン

授業終了の鐘が鳴ると同時に指導員の『藤岡堅地』（ふじおかけんじ）、が教室に来てチョークで撃ち抜かれた二人を掴んだ。

（おそらく指導室行きだろうなあ）

そんな風に思いながら見ていると目が会った。

「相原、お前もついでに指導してやろうかあ？」

筋肉ムキムキの身体で睨み付けながら問いかけられたので命の危険が有りそうだし、何もしてないので丁重にお断りしておいた。

「ふん、まあいいか今はこの二人を指導するほうが先だからな！」

ドスドスと足音を発てながら二人を引きづって教室から出ていき、俺はこれから間違はなく二人に訪れるであろう悲劇に手を合わせて拝んでおいた。

「さてと、俺も家に帰るとするか」

俺は高校に入学すると同時に柴川家を出ていき、現在は一人暮らしをしているが、先に言っておこう一人暮らしに憧れている者よ、全然自由では無いぞ、毎月光熱費や水道代やアパート代を払わなきゃいけないし、飯の支度や洗濯等も自分でしなくちゃいけないんだ。しかし、俺には最高のお手伝いさんが居る！

「・・・くん」

おっ、近づいて来たぞ将来良い嫁に成る我が妹が。

「祐君」

トトトテと走りながらこちらに近づいてくるのは俺を救ってくれた人、歳は俺より一つ下なので一年生として今年の春に入学してきたばかりだ。

「良かった、祐君まだ居てくれたんだ」

「まあ、こっちは今授業が終わったところだからな、彩はどうしたんだ？ 今日弓道部の練習じゃなかったのか？」

俺が皆に心を開いてからは彩はすっかり俺に甘えたりするようになった。

彩は俺と違って早くも部活に入部したからそんなに暇な日はない筈なのだが。

「うん、弓道部の練習はあるけど、今日は私の家で家族揃って懇親会があつむぐう！？」

「わっ、馬鹿！」

俺は即座に彩の口を塞いで黙らせる。

懇親会をする理由は一つ、俺が柴川家から別居してこの高校付近のアパートに部屋を借りたからだ、その時叔父さんから出された条件の中に二週間に一度柴川家に家族全員で集まり、その間に何があつたかを報告する、それが幾つかある条件の一つだった。

俺は柴川家に引き取られはしたが、名前や名字を変えることはしなかった、理由は単純下手に同情されたりその時の事を掘り返したりしてほしくないからだ、友達には単身赴任で両親だけ海外に行っている事にしてある。

幼い頃は親との縁が本当に切れてしまいそうだから変えたくなかった、今はまだまだ多くの理由があるんだが、それは追々語っていきたいと思う。

「うー！ むむー！？」

おっと、深く考え込んでいたようでいつの間にか彩は苦しそうにしていた。

俺は慌てて手を離して解放した、彩は解放されると同時に精一杯空気を吸って吐いてを繰り返していた。

「ぷはっ、酷いよ祐君！」

「何を言うか、今のは変なことを言おうとするお前が悪い」

ぷくつと頬を膨らませて、怒っていることをアピールするが、俺にはひまわりの種を口に入れてあるハムスターにしか見えそうにない、近くに居る別クラスの奴がそれを見て俺には首を斬って死ねと言うジェスチャーをして彩には天使を見るような目で見つめていた

（中々器用な奴だな）

そう思うがとりあえず柴川家に向かうためその場から立ち去ろうとしたとき、廊下の曲がり角から何かが聞こえた、いや聞こえてしまった。

「彩を苛める奴は誰だー！！」

廊下を全力疾走しながら角を曲がり、彩とその近くに居る俺を見つけて俺のみに殺気をぶつけながら走ってくる。

(すげー、あのスピードで曲がりきれるのか)

スピードに感心していたのが悪かった、いつもなら簡単に回避出来るものを一瞬の油断で奴の射程範囲内に入ってしまった。

「またしても相原先輩か、今日こそは死つねええええー！！」

「ぐはあっ！？」

ロケットの様に直進しながら接近する奴の普段なら避けられる飛び蹴りを油断していたから鳩尾に入れられ、メキヨツと嫌な音がし、その音と共に派手に廊下を転がり、壁にぶつかることと漸く止まれた。

「あ、あのー相原先輩生きてますかー？」

「祐君大丈夫！？」

「……………」

「返事がない、ただの屍のようだ」

こんなときにも馬鹿をやれるあの馬鹿女が恨めしい、死んだら必ず呪ってくれようぞ、最初は心配してくれてんのかなあ、とか思っ

だが、奴のニヤニヤ顔を見てそんな感情は消え去った
そんなことより身体が痛い、これ常人にやったら間違はなく後遺症
が残るぞと思いつながら、なんとか動く身体を根性で立ち上がらせ、
力の限り睨み付けて見る。

「良かった、生きてたんですね先輩、では私はこの辺で失礼しま
すね（ちっ、死ねば良かったのに）」

「良かった死んじゃったかと思ったよ」

「おいこらちよつと待てそのドS、聞こえてないと思ってるか
も知れないが聞こえてるぞ」

「なんの事ですか？（わざと先輩にだけ聞こえる様に言ったんで
すから、そんなこともわからないんですか理解できないなら死ねば
良いのに）」

（その無駄な能力はもつと別なことに使えば良いのに）

「無駄じゃないですよ、私は彩の為だけに使っていますからね（
先輩のようなグズとは違うんですよ）」

「心読まれた!？」

「考えてることが単純ですから顔に書いてあるんですよ」

「へ？」

咄嗟に顔を触りそうになるが即座に異と気づいたので、睨んでやる
ことにした

「ちえ、あと少しで先輩の馬鹿差がわかったのに、（馬鹿でもそこまで無能ではないと）」

「駄目だよ、亜紀ちゃん、祐君にいきなり馬鹿なんて言っちゃ」

「はっ、すまない彩、相原先輩の悪口を言っちゃって、もう言わないようにするからどうか慈悲を」

決して俺の方を向くことなく、彩だけを見て答えるのは『松本亜紀』（まつもとあき）、彼女は俺より一つ下で彩とは小学校からの仲だ、常に彩の事を考えていてよく柴川家にも遊びに来ていたから俺の過去についても多少知っている。

昔は俺にも普通に接してくれていたが、いつからか今みたいに人を馬鹿にするようになったが、俺以外には愛想が良く、俺以外からは可愛いとか性格が良いと言われてる、銀色一色の綺麗なショートヘアで女性にしてはかなり高い身長で彩に勧められてバレーボール部に入部している、因みに俺は男だが女のこいつと殴り合ったとしても勝てる自信はない、彼女の実家は松本流という徒手空拳を主とする武術の名家だ、彼女は三人兄弟の次女で実力的には弟の義孝より亜紀が強くて亜紀より姉の雪先輩が強いらしい、雪先輩も亜紀も跡を継ぐつもりはないので、弟の『義孝』が継ぐらしい、亜紀は確かに顔は可愛いと思うが、俺に対して理由はわからないがとても敵対視している。

「それより祐君、本当に大丈夫？」

彩が心配してきいてくれるが、さっきのやり取りのおかげか、だいぶ痛みが引いてきたので平気だろう

「ああ、俺は平気だよ伊達に食っちゃ寝を繰り返していたわけじゃねえし」

「成る程、まだ殺れると(折角止めは勘弁してあげようと思ったのに、そんなに死に急ぎますか?)」

「いや、やっぱり保健室行ってくるよ」

やっぱり俺はこいつが苦手だ、確実に隙あれば俺を抹殺しようとしてるんだもん、因みに急に意見を変えたのはあいつが恐い訳ではなく、本当に痛くなったただだよ、ホントウダヨ。

「さて、相原先輩は保健室に行くそうだから彩、一緒に帰ろう」

俺には絶対見せない笑顔で彩に言うが、彩はこれから部活の筈だ、もしかしてあいつ知らなかったのか？

「えっと、ごめんね亜紀ちゃん私部活が有るんだ、だから祐君と一緒に帰っててくれる?」

(彩、それは俺に死ねと言っているのか?)

「あ、ああ」

亜紀はかなりのショックを受けているようで嫌っている俺と帰ってくれという頼みをよく聞くことなく頷いていた。

「じゃあ祐君のことよろしくね、祐君に寄り道させちゃ駄目だよ」

俺に寄り道をさせるなと頼んでから小走りに武道場に走っていった。

流石に寄り道をしたくても出来ない、いやしたくないこいつと寄り道をするところくな事にならない。

「……………」

亜紀は未だに茫然としているので、確実にチャンスだ、今なら口煩い彩も居ないし、天敵の亜紀は茫然としている、彩の部活終了まで暇なのでとりあえず保健室に行くという名目で指導室にいる大輔を誘って遊びに行こう。

そう思い亜紀の横をゆつくりとぼつちりを喰らわないように通り抜け、去り際に『保健室に行くから先に帰ってるよ』と言い残し、ほんの少し足元に細工してあとはひたすら校内をダッシュ、なんて見た目が可愛い亜紀と一緒に帰らないかって？ 俺の精神と肉体が持たないし、嫉妬で闇討ちされたくない。

二年生のクラスは三階にあるので、目的の指導室は一階の保健室前、仮に捕まっても保健室に行こうとしたといえば平気だろう、三階の階段の手すりに手を掛けた瞬間声が響く。

「アハハハハ、相原先輩？ 今なら許してあげますから早めに戻ってきてくださいね？」

（まずい、あれは亜紀が本気で怒っている声だ、いつものからかう様な声ではなく、冷たく見下すと言うか、その筋の人には大人気な状態だ）

当然ながら俺にそんな変態チックな性癖はあるはずもなく、かといって戻っても確実に一発は殴られる、だとすれば俺の取れる道はただ一つだ。

「よし、亜紀から意地とか根性とかフル活用して逃げよう、生きる為には仕方がないことだ」

決意新たにその一步を踏み出そうとした時、何かに腕を捕まれた気がした

「いや、これは気のせいだろう、いくらなんでもこんなに早くにたどり着ける訳がない気のせいだ」

振り向きたくない、振り替えったら死ぬ気がする、それでも俺は振り替えた、少しでも早く謝る為に。

「ごめんなさい!!」

「キャッ!」

(あれ? おかしい俺の予感ではパンチで気絶させられるか、蹴り上げで顎を撃ち抜かれるかの二択だと思っていたんだが)

状況把握の為に恐る恐る瞑っていた目を開けると全然違う人が立っていた。

「なんだ新井か、びつくりさせるなよ」

「なんだとは何よなんだとは、だいたいアンタが勝手にびつくりしたんでしょうが?」

俺の目の前に現れたのは我がツンデレ代表、『新井涼子』(あらいりょうこ)さん、俺とは同じクラスで、金髪ツインテール、身長は平均的だが、胸はおそらく無いに等しい、彼女とは高校二年同じ

クラスという付き合いだが、俺と話すとボケとツツコミの漫オコンビが出来てしまうことで有名だ、漫才は疲れるからあまり話したことは無かった筈だが、告白？ そんなフラグを立てた覚えは無い、ならば正式に漫オコンビのお誘い？ 美人だが、それによって発生する二次災害がとんでもないことになる。

「悪いが、断らせてもらおう、他を当たってくれ」

「まだ何も言ってないわよ！ それに、こういうことを頼めるのアンタぐらいしか居ないし…」

(ヤバい、めっちゃくちゃ可愛い、金髪ツンデレ最高、ヤッホー！)

顔を赤らめながら、下を向いて恥ずかしそうに呟く姿はいつも以上に可愛いと本気で思えた。

「俺に任せとけ！」

「本当？」

とても嬉しそうな顔をしたので、それだけで俺の荒んだ心が癒されていく、この笑顔を見せられればたとえどれほど面倒なことでも充分に合うだろう。

第三話（前書き）

今回一部あるゲームをやっていないとわからない表現があります。

第三話

新井に頼まれた事は、とても簡単だった。

内容は『指導室に居る大輔の様子を見てきてくれ』と、簡単な仕事だったが、気分は晴れなかった。

「確かにあの可愛い笑顔を見ただけでも俺はラッキーだったと言えるけど、しかし大輔が相手だとはなあ」

落ち込みながら廊下を歩き、目的の指導室で必死に反省文を書いている大輔と遊を腹いせにこっちを見ているのを確認した後にシャゲダンしてやった。

（大輔が殺気を込めて睨んできたが大したことはないだろう）

多少スッキリしたので新井に報告しに2-5の教室に向かっている最中に切りっぱなしだった携帯の電源を点けて、携帯に来ていた亜紀からのメールを見て更なる不幸を確認してしまった。

「なんじゃこりゃー!!」

昔やっていたドラマ、太陽にえろを若干意識しながら叫び、もう一度メールの内容をしてみる。

『件名、先輩へ』

今すぐ2-3の教室前に来なければ、次回会った時が先輩の命日になる可能性がとて高くなります。

psもし、このメールを彩に見せたら骨はおろか塵の一つも残らないと思ってください』

(怖っ！ 次会ったらあの子間違いない俺を殺すよな、こんなことなら新井の頼み事を断ればよかったな、俺にとって+にならないことだったし)

これは俺にとって大きな選択肢だった、先に亜紀の場所へ行つて殺されるか、新井の所に言つて精神的なダメージを負うか、どうしたものかと悩んでいると俺の中で天使と悪魔が戦いを始めた。

『先に亜紀の所に行つて亜紀をどうにかして抹殺するのよ』

(お前、本当に天使か！？ 白い羽は生えてるけど中々エグいこと言つな、次は悪魔の言い分を聞こうじゃないか)

『先に新井の所に行つて精神的ダメージを負う前に抹殺する、その後亜紀を抹殺して学校から逃亡する、これが最良だ』

(いやいや、お前らどちらも言つてることは犯罪だから、捕まるわボケ、それ以前に亜紀を抹殺する難易度は半端じゃないし、というか一方的に俺が殺られて終わりじゃね?)

全然気が乗らないが、とりあえず2・3に行く前に2・5に向かわなければ、無事に2・3から生きて出られるかわからないからひとまず亜紀ではなく、新井が待つている2・5に先に向かうことにした。

「よう、戻つた…ぞ?」

「ひゃう!?!」

2・5に着いたとたん驚くべき物を見てしまった。
なぜなら、新井が大輔の野球で使うバットに一心不乱にすりすり
と頬擦りをしていたからだ。

「……………」

「えっと、これには深い訳が有って」

「じゃ、俺は帰るから、アバヨ！」

「ま、待ったー！！」

ぐえっ、あの野郎俺が後ろを向くと同時に距離を詰めて首根っこ引
つ張りやがった、それもかなり手慣れた動作で。

「ゴホゴホ、お前、俺を殺す気か？」

「そうね、この秘密を知られた以上死んでもらうのも良いかしら
？」

（あれ？　なんかキャラ変わってね？）

一目見たときから誰かに似てると思ったたら漸く誰か分かった、こい
つは亜紀に似てるんだ、だからあの殺人的な動きが出来たんだ。

「落ち着け、話せば分かる、落ち着いて話合おうじゃないか、き
つと、いや必ず分かり合えるからその手に持った大輔の金属バット
を持って近寄るな！」

「平気よ、一瞬だから」

ゆらり、ゆらりと動きながら近づいてくる新井、このまま大声を出せば助かるかもしれないが、近くの教室には亜紀が居る、これを見たら間違いなく俺を助ける側ではなく、殺す側に回るに決まってる、それだけはなんとしても避けなくてはならない。

（ならば俺が使える作戦は一つしか無いじゃないか、昔の人は良いことを言っただよな、三十六計逃げるにしかず、逃げるが勝ち、となあ！！）

逃げ込む場所は幾つかに絞られる、一つは彩の居る、競技館、二つ目は自宅、三つ目は生徒指導室の三択に絞られた。

（どうする？ 彩の居る競技館に逃げるか？ いや、不可能だな、彩が盾になってくれるのは亜紀の場合だけだ、新井が相手なら大輔の所に逃げるか？ いやいや、さっき散々煽ったばかりだからなあ、新たな敵を産みかねない、となると残った場所に逃げるしかないか、全力で）

逃亡ルートを決めた俺は周囲を見渡し、ギリギリと距離を詰めてくる新井から離れながら、状況を改めて整理し直す。

（よし、落ち着けよ、まずここは萩野高校（通称萩校）の二階、靴は持っていなくて、2・5に居る、敵は目の前に居る新井に、二つ隣の2・3に居る亜紀、今俺に殺意を抱いているのはこの二人で、その二人から俺は死ぬ気で家に帰るつもりだ、ここから家まで走って10分、この下は直で玄関に繋がってる、すなわちこの階から飛び降りれば勝ちだ、よし勝てる！）

作戦を組み立てた俺は即座に行動に入る準備をする、まずは一瞬で

良いから新井の目を眩ませる為に黒板に向かって走る。

「逃がすかあああ！」

背後からブンブンと手に持った金属バットを振り回し、追いかけてくる。

「おいおい、こんな当たったら間違いない脳挫傷かなんかは起こるな」

必死に逃げたり、向き合って金属バットを避けたりしながら少しずつ近寄り、黒板消しをとり、おもいつき叩いた。

「くっ、げぼげぼ」

予想通り、隙が発生して、新井の脇からを通り抜け、助走がついたまま跳躍し、下へと落ちる。

「うおおああ、思ってたより高けえ！ よっと」

自分でも予想外な高さだったので少し取り乱したが、なんとか着地に成功した、周囲には人がいなくて助かったが、2 - 3の教室をふと見てみたら、般若の如く怒り狂っていた亜紀が俺を見てニヤリとするのが見えた。

(まずい、ここには絶対に駄目だ、亜紀の身体能力は新井を軽く凌駕し、俺より少し高いレベルだ、男の中でも身体能力が高いほうだと思ふ俺だが、逃げ足以外では奴にほとんど負けている、(逃げ足でもたまに追い付かれる)俺が出来たことを奴が出来ない訳がない)

校舎の下駄箱から靴を持っていき、全力疾走を始めると同時に亜紀も二階から飛び降りて来た。

(ええい、萩野の女性は化け物か)

「俺が言う台詞じゃないが、危ないから止めとけてってそういうの！」

「ははは、先輩貴方を殺るためならば大体のことはやってやるさ」
いつの間に靴を履き替えたのか、亜紀はものすごい速さで追いかけしてきた、きつとアレは何かイカサマがあると信じたものだ。
校門を抜け、商店街に出た俺は人がよく通る場所だけを走り、人の合間を駆け抜ける。

しばらく走り続けると、商店街を抜けることが出来た、後ろを見ても亜紀が追いかけてくることはなかった、おそらく振りきれたのだろう。

「ふう、急死に一生を得たって感じが」

生き延びた事を感謝し、ゆっくりと帰り道を歩いて行く。

(ここまでくれば、あと少しだな)

目と鼻の先には目的地の団地『風花』(かざはな)が見えている、この団地の二階、205号室に着けば逃亡完了となる。

(しかあーし！ まだまだ油断は出来ないな、亜紀は目的地を知ってるだろうし、諦めの悪さは筋金入りだから待ち伏せでもしてるかも知れないな)

周辺に人影や嫌な予感無し、安全を確認しながら入っていく。

(亜紀の姿は無し……か、俺の勝ちだ！)

205号室の前まで来た俺はすぐに制服のポケットから鍵を挿し込み、ドアノブを握り勢いよく回すが、何故か開かなかった。

(あれ？ まさか開いてたか、いや鍵はちゃんと閉めたし、誰か来てるのか？)

俺は友達と遊ぶ時や彩達が来て俺が居なくても入れるようにドアの付近にプリンターを置いて、土の中に合鍵を入れて置いてあるから誰かが来たのかもしれないが、今日は誰かと遊ぶ約束をした覚えは無いし、その類いのメールも来ていない、気になるが入れば誰が来たのかわかるので、深く追求せずに、もう一度鍵を差し込み、今度こそドアを勢いよく開けた。

「ただいま！ 誰か居るのか？」

玄関で声をあげるが、シーンと静まり返っていて返事も返ってこない。

(もしかして本当に鍵を掛け忘れたのか？)
ゆっくりと足音を発てないように歩きながら自分の部屋のドアを開けた。

「……………」

「……………」

思わず沈黙してしまっ、全身からは危険信号が鳴り響いている、部屋を開けるとさっきまで命懸けの鬼ごっこ（俺にとって）の相手が怖いほど素敵な笑顔を向けてこちらを見ていたのだから。

第三話（後書き）

シャゲダン駄目、絶対に

第四話

(これは明らかな死亡フラグだったのかな?)

そんなことを思っていると声を掛けられる。

「先輩の部屋なんです、座ったらどうですか？」

「は、はいっ！」

亜紀は俺のベッドの上に座っていてニコニコと笑いながら明るい声で語り掛けてくる。

俺はO H A N A S I (処刑) がいつ始まるか戦々恐々としながらゆっくり正座で床に座る。

「先輩に聞きたいのは一つだけです、どうしてせっかくメールしてあげたのに返信もせずに二階から飛び降りて逃げたんですか？」

ニコニコと笑顔だが、目が笑ってない、嘘をつけば即処刑といった所だろう。

「えっと、メールに関しては返信を忘れてて、逃げたのは別の理由で死にそうになったからです！ すみませんでしたあー！」

日本人、いや人類の最終奥義、土下座を発動して誠心誠意謝ることにした。

(あれ？ 後輩に全力で土下座してる俺って一体なんなんだ…?)

微妙に涙が出た気がするが、これは汗と断定しておいた、決して後輩の怖さに泣いたわけではないと信じたいものだ、本当に。

「先輩」

「はいっ！ 何でしょうか亜紀さま！」

（もうプライドなんて知ったことが、そんなもの一昨日犬に食わせた）

頭を上げずに、床に額をくつつけながら亜紀の次の言葉が俺にとつての死の宣告ではないことを祈りながら待つ。

「先輩、もう良いんですよ顔を上げてください、私はもう怒っていませんから」

「へ？」

普段ならば『命を捨てる覚悟は出来てますか？』とか『懺悔は済みましたか？』とかの筈なのだが、今日に限っては優しくかった。

「私も悪かったんですよね、本当にすみません」

「あ、いや別にそこまで謝らなくても」

珍しく頭を下げた謝る亜紀を見て驚くと同時に何かが引つ掛かる。

「代わりに一つだけお願いを聞いてくれますか？」

亜紀にしてはやけに真面目な顔をして言うものだから思わずコケリと頷いた

「明日の日曜日は空いてますか？」

（まさかの展開！！ なにこれはフラグなのか？ いやそんなことが有るわけない、こいつのフラグを立てた覚えは無いし、立つならお姉さんの雪さんに立って欲しかった。）

妄想の海に入ろうとしていたところ亜紀は俺をウジ虫を見るような目で見つめていた、相変わらずそういう趣味の人に大ウケしそうな視線だった。

「コホン、で何の用なんだ？」

「実は義孝が久しぶりに先輩に会いたいから連れてきてくれって言ったから、家の道場まで来てくれませんか？」

「断る、それだけは本当に却下だ」

「なっ！？ 意地でも来てもらいますよ」

「行きたくないでござる、絶対に行きたくないでござるー！」

部屋を飛び出ようとした瞬間何か雑誌のようなものが後頭部に直撃しておもいつきり転げた。

「つてえー、っ！？ これはまさか」

投げられた雑誌はいつも俺が愛読しているエロ本の雑誌だった。

「なぜ、これを？」

「これですか？ たまたまベッドの下を覗いてみたら見つけただけですよ」

ニコニコ笑顔を絶やさずに新たに二冊ベッドから取り出し見せつける。

「これは彩に報告しても良いですか？」

「わかった、そちらの要求を全面的に承諾しよう、いやさせていただけますので彩に報告だけはお許しください、亜紀様あー！」

体勢を立て直し、もう一度土下座で頼む。

（彩にバレるのだけはまずい、以前バレた時の事を思い出しただけでも……ヒイイイ！ふ、震えが止まらない）

その時の彩の怒りを表現するなら、亜紀が本気で震えるぐらいだった。

もし、よくわからないならあれだよ、言うことを聞かない部下に収束砲を撃って撃墜する人、あんな感じの怒りと思ってもらって構わない、つまりそれほど彩の怒りは恐ろしいなと言うことだよ。

「まったく、そんなに義孝が嫌いなんですか？」

「いや、そういう訳じゃないんだがなあ（本当は義孝とお前が苦手なんだよ）」

「なるほど、どっちが一番苦手なんですか？」

「それは勿論おまゝ、…じゃなくて苦手な人なんて誰一人いません」

「よろしい」

汚え、アイツ絶対汚えよ、本音を言いそうになったら携帯を見せてきたんだもん、あれは変なことを言えば彩にチクるっていう意味での脅しなんだもん。

「そんなことより、そろそろ帰れよ、尚子さん心配するぞ」

尚子さんとは亜紀の母親で俺が亜紀の家に行くといつも赤飯を炊こうとする困り者だ。

「まだ平気ですよ、それより暇なんでゲームしましょうよ」

「ちゃんと連絡しとけよ健太さんには俺が怒られるんだから」

健太さんは亜紀の義理の父親だが、家族全員仲良く、そして明るくをモットーにしているため再婚に関して妙ないざごきは起こらなかつたらしいが、家族を大切にすぎるので、子離れ出来ない親代表に選ばれるだろう。

「はいはい、ちゃんと連絡しますよ」

本当にわかったかは知らないが、とりあえずちゃんと返事をしたから、ゲームを取りに隣の部屋まで行き、P 2を持ってコンセント

の配置をする。

「何のゲームがやりたい？」

招かれざる客とはいえ、一応は客なのでリクエストを聞いてみる。

「そうですね、先輩が持つてるエロゲやギャルゲーがやりたいです」

「わかっ…ここにはそんなものないぞ」

危なくある場所を教えそうになったが、なんとか免れた、俺は隠しである場所とはあえて正反対の冷蔵庫に視線を移す。

「へえ、そこが隠し場所ですか」

近寄って確認しに行こうとする亜紀を止めて、別の話しに移行させようとする

「ぐっ、それよりその他に何がやりたい？」

「ふっ、先輩の趣味を確認するよりしたいことは無いですね！」

押し合いになり、俺は本気のフリだが、亜紀は若干本気で押ししてくる、全力を出しても勝てない相手が若干とはいえど本気を出しているのだから勝敗は呆気なくついた、俺が弾き飛ばされるといふ形で。

「くそっ、やめろー！ 荒らすなー！」

「ふっふっふ、これが先輩の趣味かぁー！」

叫びと共に、冷蔵庫の下に有る何かを引き出した。

「う、」

「う?。」

「うわあああー!」

いきなり叫び、俺から全力で距離をとる。

「い、いつたいなんて本を読んでるんですか!?!」

「ちょっと待て、そこに有るのは料理本のは…ず…、なん…:…だと?。」

何故、何故だ、何故アレがここに有るんだ、アレは俺の所有物ではないし、俺の好みとは正反対の書物だった、名を『世界の幼女大図鑑』これで今夜は寂しくない!』

「亜紀、ちょっと待ってくれ」

「近寄らないでください、穢れが感染します」

ゆっくり近寄ろうとする俺に本気で殺気を込めて睨み付ける亜紀にどうするかを考えなければならない

1、正直に話す

2、そうだよ、僕は亜紀みたいに貧乳とか、小さな子が好きなんだと存在しない性癖を告白

3 土下座して話しを聞いてもらう

4彩に説得してもらおう
5襲う

(さて、どれにしたものかひとまず二番と五番は論外だな、話しに
ならんし、四番も勘弁してほしいな、更なる厄介事に巻き込まれ兼
ねない、となるとあとは一番か三番か、でも土下座はさつき使った
しなあ、かと言ってまともに話を聞いてくれるとは思えないしなあ、
ホントどうしよう)

side 亜紀

信じられない、確かに先輩は多少変態な部分もあった人だけど、ま
さかロリコンだったなんて。

(しかも、この表紙の子顔だけは凄く私に似てるし、もしかして
ずっと私を狙っていた？ もしそうなら先輩は危険だ、最悪彩にも
被害が及ぶかもしれないから早急に始末しなきゃ)

「先輩、いえ変態ロリコン野郎、今すぐ貴方を殲滅する事にした
んで、懺悔を済ますまもなく無惨に死ねええ！」

言葉と共に今出せるスピードと威力を最大限に引き上げ回し蹴りを
放つ。

「うおおおー！！ 死んでたまるかああー！！」

私の蹴りを精一杯身体を捻ることで回避したが体制を崩してしまっ
たので私に向かって倒れ込んで来るのでボディーブローを叩き込む

用意をする。

「ちよつ、待った」

「問答無用です」

にこりと今見せられる最大限の笑顔とパンチをレバーに叩き込んだ。

「ぐぼあつ!?!」

酷い悲鳴と共に床に倒れ込んだのでその上をわざと踏むようにしてゾンビのような呻き声をあげている先輩へんたいを無視し帰宅した。

(まったく、いったい先輩は何を考えているんだ、ただのエロゲやHな本ならまだしも、あんな小さな子や私に似た…)

そこまで考えて自分の顔が真っ赤に染まっているのを自覚する。

(私は何を考えているんだ!? 相手はあのだ変態の先輩だぞ、確かにちよつとエロいところはあるけど、そのぶん誰にでも優しくて私を理解してくれてる。って違う違う、私は別に先輩の事が好きनावけじゃない!)

結局私はもやもやした気持ちを抱えたまま帰宅した。

第五話（前書き）

先週は投稿できなかったなので二週分投稿します。

第五話

昨日は本当に酷い目にあつた。

目を覚ませば秘蔵の工口本は隠し場所から出てきてるし、絶対に俺の趣味じゃない工口本まで置いてあるし、この本は今日の学校で本人の目の前で返却してやると決めている。

腹が何かに抉られたように痛いし、頭がガンガンするし、原因すら思い出せないしまつだ。

「とりあえず学校行くか」

時刻は7時半、学校に行くのは少しというか早すぎるがたまには掃除でもして学校に貢献でもしよう。

鍵を掛けたことを確認して天気を見ると普段と変わりなく晴天であった。

「今日も気持ちの良い朝だな」

学生寮から萩校まではだいたい10分程度つく、周囲を見てみるとうち（萩校）の制服を着ているのをちらほら見かけるが、おそらく部活動の朝練だろう、その中で見知った顔が有ったので声をかけることにした。

「おはようさん、今日も早いな」

「ふえ？」

後ろから声をかけられたからか変な声を出しながらくると振り向いた。

「あれ？　こんなに朝早くにどうしたの？」

「ちょっと早めに起きたからたまには早く来るのも悪くないかと思っただけ」

「へえ、佑くんが早起きなんて珍しいね」

さすがにそこまで驚かれると心外だ、それでも眼は開けている（眼だけだがな）のだが。

「それは起きてるって言わないよ、それに起きたんだっいたらちゃんと来ないと駄目だよ」

「もしかして口に出たか？」

そうだとしたら癖にならないように気を付けなければならぬだろう。

そんな俺を見て彩はクスリと笑う。

「ううん、口には出てないけどそんな顔してたよ」

「マジかよ…」

orzの体勢になろうと思ったが、道の真ん中でやると行人の邪魔になるのでとりあえず近くの壁際でやっておいた。

「前から聞こうと思っただけで、どうして祐くんは失敗したり落ち込んだ時にorzの体勢になるの？」

「そ、それは」

「それは？」

「どうする、どうすれば どうしよう？ 彩になんて言えば良いんだ！」

1 ネットの用語を見た時に興味本意で使ってたら止められなくなつたと本当の事を話す。

2 俺、かっこいいだろ？ と言つて話の論点をずらす

3 ネタをやる

「どうするよ俺、二番を選んだら単なるナルシストに思われるし、三番に至ってはネタなんて直ぐには作れないし、考えろ、まだ打つ手はあるはずだ」

考えること数秒、新しい案を最良の策と判断し、即座に実行に移る。

「あ、彩なんだあの東の空に上がっている紅い光を発する物体は！？」

「え、どこにそんなのあるの？」

俺の数有る苦しい言い訳の一つ、あ、あれはなんだ！？ 作戦を使い、なんとか九死に一生を得ることが出来た。

「ふう、助かったか」

彩に聞こえないぐらいの声でため息をつく、未確認生命体を探すのを諦めたのか、少し頬を膨らませてこちらを睨む。

「もう、もつと早く教えてよね祐くん！」

「いや、悪い悪い俺も直ぐに言ったんだが逃げ足だけは早いみたいで」

正直彩以外にはこんな方法で誤魔化せることが出来る訳もない。思えば彩は昔から純粹で人の悪意を疑う事をする事はなかった。おそらく俺みたいにひねくれた人種とは違い、性悪説ではなく、性善説を信じているのだろう。

「唐突だけど彩は性善説と性悪説どちらを信じる？」

「えつとそれって人は生まれながら善であるか悪であるかっていう事だよな？」

「大雑把に言えばそうなるな、それで彩はどっちを信じてる？」

少し考え込むように首を傾げるが、答えは決まったのだろうかこちらを真剣な眼差しで見る。

「私はやっぱり性善説を信じたいな、世の中悪い人は居るんだろうけど、私はそれでも人の悪意なんかより善意を信じたい」

そう言つとこちらから顔を背けて、小走りに学校側に向かっていくが途中で笑顔で振り替える。

「だって、もし全ての人を疑ってたらいつか自分が壊れちゃうよ、それに自分が信じなきゃ、相手も信じてくれないもん」

「……………、まったく彩にはかなわないな」

「ふふっ、じゃあ私は部活に行くから先に行くね、バイバイ」

そのまま俺の返答を待たずに、学校に走っていった。
携帯で時間を確認すれば部活動の朝練の時間が近づいていた。

「まったく彩の奴、俺の話しに付き合う為にギリギリまで居てくれたのか」

「それが彩様の良いところだろうが」

隣を見ればスキンヘッドで筋肉ムキムキの巨大な筋肉の塊がこちらを見てドヤ顔をしていた。

「なんの用だ、筋肉禿げダルマ」

「んなっ！？ この俺様に向かって禿だと？」

「筋肉ダルマは良いのかタコ坊主」

「そもそも俺様の名前はは禿げでもないしダルマでもない、木戸^{きと}大和^{やまと}だ！」

この筋肉禿げダルマは彩の小学校からの熱狂的なファンの一人で見
ての通り、脳が残念な奴だ。

「はいはい、そうだったな木戸、お前は朝練に行かなくて良いのか？」

正直こんな暑苦しい筋肉の塊の隣を歩くのは凄く嫌だ、ただでさえ萩高はBLを書く奴が多いのに、そいつらのネタになるのは勘弁してほしい。

「おっとそうだったな、もし良かったらお前のもやしみたいな体を俺様のマッスルで素晴らしい筋肉の体にしてやるが？」

「誰がお前みたいな筋肉禿げダルマになるか、タコ少しはオツムを良くして出直してこい」

そう言い放つてやると全身ではなく筋肉をぶるぶると震わせる。

(俺の目が腐りそうだ、普通にキモい)

「ぐぎぎぎ、黙って聞いてりゃ言いたい放題言いやがって、ぶっ潰してやる！」

そう言い終わる前に飛びかかってくる。

「はっ、お前なんて狭い場所で戦わなければ余裕なんだよ禿げダルマ」

確かにまともにもやりあえばこんな筋肉の塊に勝てる訳がない、だが相手は脳筋なので速度や足払いなどで圧倒出来る。

「うおお、何で避けるんだよ、男なら拳と拳のぶつかりあいだろうがあ！」

「お前相手に力で勝負はムリゲーだったので、勝てる方法じゃないところちが死ぬわ馬鹿」

鍛えぬかれたパンチを避けてそう言い放ち踵を返し、学校側とは逆方向にギリギリ追い付かれる速度で走る。

「はっはっは、それぐらいならば追い付いてミンチにしてくれるわぁー！」

「追い付いてみるよ、タコ坊主」

「ぐあああ、許さねえ絶対に許さねえ」

怒りの形相で俺を追いかけて走るが、手を抜かなければあの筋肉ダルマよりは早いので追い付かれるはずもなく、結局連続で道を曲がったりしてるうちに背後の暑苦しい気配は消えた。

「よし、これでアレは朝練遅刻決定だな」

朝から良い運動もしたので近くのコンビニでスポーツ飲料を買って学校に向かった。

第六話

あの筋肉ダルマを撒いてから走って学校に着いたが、時刻は7時45分、ホームルームの始まりが8時半なので45分近く暇が出来てしまう。

「何して時間を潰すかな、とりあえず大輔にイタ電だな」

携帯のアドレス帳から篠家大輔の名前に非通知でかける。

四コール目でようやく電話が繋がった。

『ふあい、どちら様ですか?』

一度喉を鳴らし、出来るだけ野球部の顧問の声を真似る。

『いつまで寝ておるつもりじゃ、篠家! 寝坊で朝練に遅刻とは
のう、罰として貴様はグラウンド整備三週じゃ!』

『ひいっ、すす、すみません監督、今から行きますのでお待ち
ください』

電話越しにドタバタと音がするので、焦って用意をしているのである、そんな姿が眼に浮かぶ。

(少し惜しいがネタバレしてやるか)

『監督、用意終わったんで今すぐ行きます!』

『おうおう、兄ちゃん朝練遅刻にそれだけで許してもらえと思
ってんのか？ ああ！？』

『はあ？ お前その声は祐介だな！？ ってことはイタ電かよ！』

『H A H A H A、朝から木戸に会ったからついストレス解消にな』

『全然俺関係ないじゃん！？』

『気にすんな、どうせ朝練あるんだろ？』

『まあそりゃ有るけどさ、なんか釈然としないよな、はあっ』

『ちなみにこの会話テープレコーダーで録音してるから』

『てんめえ』

これ以上の会話はダルいので電源を落とした、俺は悪くないはずだ。

「大輔のお陰で10分は潰れたが残りはどうするかな、またトラ
ップでも仕掛けるか？」

以前は黒板消しを至るところに仕掛けて、教室中を粉まみれにした
が、当然ながらバレてしまった。

「なら今回は犯人が俺だとバレないイタズラをするか」

「ふう、これなら上出来のレベルだろ」

出来上がったアートを見て満足したところで、教室を出る。

(思った以上に時間をかけたな、早く出ないと見つかるかもな)

あれから20分、二階から外を見てもチラホラと学生が来てるのが見えるから、これ以上とどまるのは危険だろう。

しかし時間をかけただけ、満足のいくものが出来た。

「さーて、早く誰か来ないかな」

実際に見た人の反応を見たいため階段付近でクラスメイトが入るのを待つ。

「中々来ないな、もう5分が経過するぞ」

じっと待つのも飽きてきたその時、階段を爛々気分で登ってくるピクシオの馬鹿がいた。

「きょうも、良い天気、明日はもっと良い天気。」

「いつにもまして幸せそうだな、お前」

背後からいきなり声をかけて驚くと思っただが、動じる事なく振り返った。

「やっぱり祐介さんでしたか」

おっとりとした口調で話す女性は安西康子あんざいやすこ俺の小学時代からの腐れ縁で今まで別のクラスになったことはない。

「それにしても安西は普段登校するのこんなに早かったっけ？」

普段俺が覚えている限りではだいたいホームルーム開始のギリギリに間に合うかどうかだったはずだが。

「今日ですねえ、珍しく早い時間に目が覚めたので直ぐに来たんですよ、そう言う祐介さんも朝に強い方で無いのでは？」

「そうか、俺も似たような感じだな、ちなみに何時に起きた？」

「え〜っとお」

指を折り曲げて計算してる姿はなんとも愛らしい姿だ、流石は『おっとり天使』の呼び名をもつだけはある。ようやく数え終えたのか指を折り曲げるのを止めた

「今日は朝の5時ですねえ」

「めっちゃくちゃ早いよっ!？」

思わず普段はボケの役割の俺がツッコミをするほど驚いた。

「時間になるまで何してたんだ？」

「それが、二度寝してしまいました……」

「早起きの意味ねえじゃん！」

（気がついたらまたツツコミをしていた、ボケ担当の俺がここま
でボケれなくさせるとはやるな安西）

そうこう言っているうちに教室に着いた、安西がどんな反応を示す
かが楽しみではない。

「一番乗りでしょうか？」

「多分そうだろう、さっさと入ろうぜ」

「それもそうです…ね」

ガラリとドアを開けた安西は、ピタリと固まり一度ドアを閉める。

「どうした安西何か有ったのか？」

俺の角度からは部屋が見えないので笑いを堪えてわざと聞いておく。

「……………」

もう一度ガラリとドアを開けて直ぐにこちらを向く。

「ど、どうしたんだ？」

何かとてつもなく嫌な予感がする、やってはいけない行為に至って
しまった感じがする。

「祐介さん？」

「ど、どうしたんだ安西？」

普段は明るい声の筈だが、今は違う、まるで地獄の亡者のような低い声を発する。

「これをやったのは祐介さんですよね」

「い、いや俺の筈が無いだろ、ここまで一緒に来ただろう？」

「そうは言っても祐介さんぐらいしかこんなことをする方は祐介さんしか居ませんし早めに白状してくださいね」

明らかに俺が犯人だとバレているのでこれ以上の茶番は無用だろう。

「まあ、流石にバレないとは思わなかったけど、こんなに早いと思わなかったな、ところで安西こいつを見てくれどう思う？」

「最悪のオブジェですので早く直してくださいね」

「……………、わかったよ」

これだけボロクソ言われれば誰でも嫌になるだろう、渋々言われた通りに一教室分の机で作ったピラミッドを崩して元通りにする。

「それが終わったら正座でお説教ですからね」

「はい、わかりました」

結局ピラミッドを直した後にホームルームが始まるまで正座で説教を受けてしまった。
しかしその後に変更する恐怖が待ち受けている事を俺はまだ知らなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2018z/>

変わりなき世界の中で

2012年1月9日03時45分発行